

校庭にくらす雑草

校庭には雑草が生える。やっかいに思うこともあるが、草が生えるのは自然のしくみの一つである。校庭にくらす雑草たちのようすを見て、自然のしくみを理解する入り口にしていこう。

校庭の雑草はいつも踏まれたり、刈られたり、抜かれたりといった人の手がかえられている。人手の加わり方は場所によって違い、それによって雑草の生え方もさまざまである。さらに季節によっても雑草たちのようすが違ってくる。

毎年出てくる校庭の一員として、雑草を見ていこう。くわしい観察をすると、たくさんの発見があるだろう。



春、校庭の一角の築山は雑草のパラダイス。ヒメオドリコソウ、セイヨウタンポポ、オオイヌノフグリなど。(5月)



よく見ると草の生え方が違う。高学年の使うところ（奥の大きなタイヤ）は草の生え方が少ないようだ。(7月)



運動施設のまわりも踏まれ方による違いがはっきりしている。カゼクサ、シロツメクサなど多年草が多くなる。(7月)



冬のセイヨウタンポポのロゼット。積雪で古い葉は枯れてしまっても、中心部の芽は生きている。(12月)



建物ぎわからグラウンドにかけて、雑草の生え方が変わる。一定の調査法によりこれを数値化すると、群落の変化の傾向がはっきりととらえられる。(調査法は巻末の参考図書「校庭の雑草」を参照)



この施設も踏まれにくいところに雑草がのびる。チガヤ、カゼクサ、ヘラオオバコ、ハルジオンなど多年草が多い。(7月)



フェンスに囲まれた中にはセイタカアワダチソウやヨウシュヤマゴボウなど、背の高い草がのびている。(7月)



流水実験地。春にはホトケノザ、カラスノエンドウ、アメリカフウロ、ナスナ、スズメノカタビラなど越冬草が茂る。除草の前に観察ができる。(3月)



校庭の一角に置かれた1m四方のわく。「定置わく法」といって、いろいろな手を入れながら草の生えてくるようすを継続観察し、記録する方法。



数年間放置された流水実験地。オオアレチノギク、ヒメジョオン、ヒナタイノコズチ、ヤブガラシ、アズマネザサなどが入り込んでいる。(7月)